第９回全学FD「成績評価の現状と課題」について
－ワークショップ形式FDの成果および今後の課題－

新潟大学
大学教育開発研究センター　加藤かおり

はじめに

第９回全学FDは、昨今の大学教育改革の重要な課題の１つとされている「厳格な成績評価」をテーマに、従来の講演型FDを再考し、ワークショップ型による全学FDの初めての試みとなった。

本論では、その実施状況を報告するとともに、FDの成果、および今後の課題について検討する。

１．ワークショップ形式導入の背景－FD改善の問題意識

従来のFDは、講演形式によって行われてきた。この形式は、全学教員を対象に、啓発的な情報共有を行う場としては有効であったが、例えば、以下のような反省点もあげられた。

○　啓発的情報共有を目的とする講演型のみでは、そこで掲げられた課題について、教員個々人が自分自身の課題として認識することにギャップがある。
○　その結果、討議において、拒否反応による意見や、課題の本質に基づかない批判意見などが混在し、前向きな方向性が見られない。
○　教員間でのコミュニケーションが不足している。
○　そのため基本的な共通認識が成立していないばかりか、周囲への不信感さえ生じることがある。
○　課題に対して敏感な学部と、そうでない学部との格差が大きくなりつつある。
○　参加者の顔ぶれに偏りが見られる。

これらの反省点から、全学で、テーマを教員個々人が自分自身の課題として捉え、自ら課題の検討に取り組む場としてのFDの開発をめざした。そして、今回、一つの可能性として、ワークショップ形式によるFDの導入を検討した。

しかしながら、このような形式での、全学の教員を対象のFDに関しては、センター教員が未経験であるだけでなく、全国的にも確立されたプログラムの事例が極めて少ない。

そのため、今回のFDは、自己変容は現状（自分）を振り返ること（reflection）によって生じるという成人学習理論（Mezirow, 1990）を参考に、まずは、①教員が日常的に教育や学生について感じていることを共有し、コミュニケーションを図る場をもつこと、さらに、②テーマとして掲げた「厳格な成績評価」について、なぜ全学の課題として重要であるのかを振り返りつつ現状を見直すことをFDの目標とし、FD改善の検討を含めての実施となった。

２．実施状況および内容

(1)　日程、参加者の状況

全学FDは、平成15年９月30日、９時30分から16時30分まで、留学生センター国際交流会議室において開催した。参加者は、全学部から学部長によって推薦された３名、および大教センター４名、合計34名（医学部は医学科２名、保健学科３名、留学生センター１名）であった。

(2)　実施内容

ワークショップは、大きくわけて午前中の(1)「教員が日常的に教育や学生について感じていることを共有し、コミュニケーションを図る」ことを目標に行われた「新潟大学の学生の現状について感じること」についてのワークショップと、午後の(2)「テーマとして掲げた「厳格な成績評価」について、なぜ全学の課題として重要であるのかを振り返りつつ現状を見直すこと」を目標に行われたワークショップにより実施した。

当日のプログラムの詳細は、参考資料（資料１）の通りである。また、参加者には、成績評価に関する全学の現状についてのいくつかの資料等を事前に配布するとともに、各自が「成績評価をする際に大切にしていること」について５点ほどあげてきていただくように依頼した。ワークショップ当日には、まず、はじめに、全学における成績評価の現状に関する主な点について、大教センターから簡単な説明を行い、全体で確認をした。その際あげられた主な点は、以下(表１)のとおりである。

表１　成績分布の現状

・教員間・科目間・分野間に格差が激しい
・必修科目（担当者複数）においても、成績評価に整合性はない
・平均GPAが2.5（素点75）より低い
・不合格が多い
・大人数授業ほど成績評価が下がる
・当てにならない日本の大学の成績表
・形成的評価（平常点）か総括的（期末試験）評価か？
・成績評価を大学が組織として保証？

成績評価の活用
・工学部においては、GPAを大学院進学・就職推薦に活用
・他学部においては、GPAを学習不振の学生指導に活用
・きわめて緩い授業料免除・奨学金貸与のための成績基準
・不合格の成績表への記載はない

（大教センター　吉永契一郎　作成）

ワークショップのうち、(1)には、単に情報交換の場としてのみならず、徹底して相手の話を聞くというコミュニケーションの基本を重視するとともに、話すということによって緊張感を和らげ、次の(2)におけるグループ作業において自分を出しやすい状態を培うという目的があった。これは、一般的なワークショップにおいてアイスブレーキングと呼ばれるもので、初めてであった人々、背景の異なる多様な人々の集団が、その集団の持てる能力をよりよく発揮できるような場づくりの手法として用いられている。

また(2)では、自分自身の現状（各教員が成績評価を行う際、大切にしていること）から出発し自己確認をする、次に他のグループメンバーの意見を知り、自分の意見との類似性や相違に対峙し振り返る、この繰り返しによって、メンバー全員の意見（文脈を含めた意味情報としての知識）を統合させた目標を確認し共有する。その上で、その目標にそぐわない現状を見直し、改善のための方策を思考することを目指した。すなわち、まず全体の目標達成に対する個々人のコミットメントを確立し、そのコミットメントをもとに課題解決を促進するというものである。

従来、民間企業等のような組織全体の明確な目標が見えにくい大学においては、各教員にたとえば、成績評価とは何のために行われ、何を目指すのかという、全体の目標が確認される機会は皆無に等しかった。しかしながら、このような目標達成へのコミットメントなくして、課題解決が遂行されるのは困難である（ゴールドラット，2002）。とはいえ、強制的なコミットメントの確立は、この場合の参加者には馴染みにくい。そこで、まずは、各参加者自身によって、全体の目標を描き出し、その共通認識を図ることを目指した。

また、実施方法に関しては、近年、新潟の地域づくり（まちづくり）において成果をあげているNPO法人まちづくり学校等の実践を参考にした。FD当日にも、このNPO法人まちづくり学校からファシリテーショングラフィック（FG）のための講師を招聘した。

3．ワークショップの成果

(1)「新潟大学の学生の現状について感じること」についてのワークショップ

午前中のワークショップでは、最近の学生について日常的に感じていることを、３人の相手と互いにインタビューしあうこと（インタビューゲーム：ペアを組み、互いに５分間ずつインタビューする。その際、何を聞いてもよい、答えたくないことは言わなくてよい、質問されないことを話してもよい、というルールがある。これを３回、異なる相手と行う）を通して、現状把握を共有し、コミュニケーションを図った。その後、インタビューした内容を、個々人でA３のシートに編集し主文にまとめ、それを全員で発表し、共有した。

目標の１つであった、「教員が日常的に教育や学生について感じていることを共有し、コミュニケーションを図る」ことに関しては、参加者に終了後に記入してもらった「ふりかえりシート」（資料２）の結果、例えば「思ったより、教育に対して真面目な教員が多い!!」「分野によっても、それほど考えていることは違っていなかった」「普段のお会いすることのない他学部の先生方と討論できた」などの気づきや振りかえりから、概ね期待通りの成果が得られたと感じている。同時に、予想されたことではあるが、教員間、とくに異なる学部間での日頃のコミュニケーション不足が再確認された。

また、自ら話すこと、相手の話を聞くという場をゲームという形で設定したこともあり、インタビュー時間中は、予想以上に活気づいていた。よいアイスブレークになった。しかしながら、後半のグループでの成果物や、振り返りシートをみると、この時間内に十分楽しめた人と、なぜこんなことをやらされるのかと楽しめなかった人との間で、グループ作業など後のワークショップ全体に対する参加度に差が生じていることがわかる。このワークショップに参加している意味が理解できなかった参加者にたいする自己対峙（自己表現や他者との関係を通して自分を振り返る、自分に向き合うこと）のための時間が足りなかったと言える。

次に、インタビューゲームの結果、各参加者が「学生の現状」について編集した主文を、以下にあげる（内容を①から③の項目別に分類し、各自の主文をそのまま並べた）。

①最近の学生の特徴

○　新潟大学の学生は、社会的リアリティを持ち、人に役立つとわかり、学習方法がわかると、自ら行動すると教師は感じている。

○　よくも悪くも素直で、やり方や目標がみつかればやる気を出す。

○　学習の目標が明確である方が勉強はするが、元気がなく、真剣味に欠ける傾向がある。

○　自分が「そこにいること」の意味をそれなりにつかんでいる学生は、それなりにモチベーションを維持している。

○　最近の学生は、全体的に積極性、真剣さに欠けるが、受講態度には学部により、また成績には入試区分により相違がある。

○　今の学生は、資質はあるが、勉学に対しての目的意識が低く、受動的であり、危機感が欠落している。

○　学生に将来展望がないことが、意欲の低さ、甘さにつながっている可能性がある。

○　多くの学生は、思考し、自主的判断を苦手とする。

○　おとなしくてまじめであるが、学生間、学生教員間のコミュニケーションが少なく、自分や他人の経験が学習につながっていない。

○　最近の学生は、学部により、学年により、種々の面で差が大きい。

○　自主的な学習意欲が減退しているが、この原因とし

て、主体性の欠落や表現能力の低下、他への興味のなさがあげられる。

○　専門の動機づけが弱く、意欲的な学習が困難である一方、情報を受動的に受け入れるまじめな学生像が浮かび上がった。

○　まじめだが、専門科目に興味のない学生と、意欲的で熱意のある学生との二極分化が大きくなっている。

②学生に対する希望

○　個として、主体的に取り組める能力が必要である。

○　男女を問わず、目的意識を明確に持ち、未知のものにも積極的に挑戦する意欲と柔軟性を持つ学生が欲しい。

③最近の学生状況に対応した教育の課題

○　学生が目標をもって学習し、専門性を身につけるための指導法や、教育法が重要である。

○　意欲的学生と、ない学生に2極分化する中、学生に意欲を与える教員の努力が必要である。

○　学生は2極分化しており、与えられた課題はこなすが、自発性に乏しい傾向がみられ、これは卒業後の自分の姿を明確化できない教育システムに問題がある。

○　最近の教員は、学生のことを「まじめ」だが「受身」と感じており、それを前提とした教育が課題となっている。

○　最近の学生がもつ能力を生かすためにスタディスキルズなどによる意欲の喚起、コミュニケーション能力の涵養が必要である。

○　学生は総じてまじめなタイプが多いが、受身的な学生である。このような学生の状況を打破するために、教育の質の改善を考えなければならない。

○　与えられた課題処理能力は高いが、自ら問題を発見し、総合する力に乏しいが、指導方法、評価方法にも問題があり、工夫が必要である。

○　学生の声を授業に反映させると、本来まじめな新大生の学習意欲を高めることができる。

○　学生の学習意欲を改善するには、学生が自主性を発揮できる環境をつくり、学習テクニックを身につけさせ、そして教員が授業に工夫を加えるとよい。

○　学生はまじめだが、他人と関わる能力が弱く、小テストや質問コメントのフィードバックなどの働きかけが重要である。

○　学生の学力、勉学意欲、思考能力等、全般的質の低下傾向がある中で、教育目標の達成に困難を感じる部分がある。

○　この20年間、学生の学力、意欲の低下ははなはだしく、大学、高校、中学校、小学校、更には、家庭の連携協力が望まれる。

○　理解力不足や勉強の目標設定ができない学生を減らす方法として、魅力ある授業が大切である。

○　主体的に関心を持って、積極的な学生もいれば、単位目的で、ただ座っているだけの学生が一つの講義の中で専門、非専門を問わず混在しており、講義のレベル設定が困難。レベルを引き上げるには、教官個人の裁量だけでなく、安定したシステムが必要となってきている。

各参加者の主文を、学生の好ましい現状、好ましくない現状、そしてこれらの現状をふまえて今後望まれることに分けてまとめると、次のようになる。

まず、好ましい現状として、多くの学生が「真面目、素直、おとなしい、資質はあり、方法や目標がわかれば行動する、与えられた課題はこなす」と見られている。反面、好ましくない現状として、「目的意識が低い、受動的、自主性に欠ける、他人と関わる能力が低い」などがあげられた。このような現状を踏まえて、今後必要とされることとして、「目標を持って学習できる教育法」「学生に意欲を与える教員の努力」「学生のもつ能力を生かすための教育（例えばスタディスキルズなど）、コミュニケーション能力の涵養」「学生の声を授業に反映させる」「(学生の意欲、学力)レベルを引き上げるための全体的なシステム」などがあげられた。

これらのことから、「真面目で、何らかの資質を持っている」学生に対して、「目的意識や自主性、他と関わりつなげることができる能力を養うような」教育が求められており、それを教員個人ではなく、全体で取り組んでいけるようなシステムが必要になってきている、という状況が見られる。

(2) 「成績評価」についてのワークショップ

午後のワークショップでは、4～5人の6つのグループに分かれて「厳格な成績評価」とは何かについてグループごと結論を導く作業を行った。まず、各参加者には、前もって「成績評価をする際に大切にしていること」を基本カードとして5点ほど用意してもらった。1つのカードには、1つの意味内容を記述した。次に、この基本カードをもとに、KJ法を用いてカードを補いながら、情報を集類し、主文（結論）を導き出した。以下の表に、最初に提示された基本カードの一部(表1)と、最後にグループごとに出した主文(表2)を、原文のまま記載した。なお、主文を導き出すまでの集類の過程の表記については、ここでは省略する。

表２　基本カード（成績評価をする際に大切にしていること）の内容（例）

○　主観的な評価にならない。	○　客観性を保つ。
○　基準を保つ（70点を平均にする。）	○　複眼的な評価。
○　平均を考慮する。	○　読んだ文献資料も加味する。
○　最初の授業で評価基準を明確にする。	○　前もって、評価方法を文書で提示する。
○　つまずきを見つける。	○　まぐれにならないテストにする。
○　多肢選択問題のテストにする。	○　テストの配点に妥当性がある。
○　到達度に照らす。	○　到達目標を明確にする。
○　えこひいきをしない。	○　学生の自己評価（変化、自覚）も見る。
○　学生の努力が報われるものにする。	○　講義と実習の両方で評価する。
○　モチベーションを高めるものにする。	○　独創性があるものを評価する。
○　考察を重視する。	○　ケアレスミス（転記ミスなど）をなくす。
○　公正である。	○　学生への説明ができる。
○　卒業後の学生の立場を考える。	○　企業等の大学成績への信頼。

表３　導き出された主文（結論）

グループ１
　成績評価の双方向性を確立することにより、学生の特性を考慮した多様な評価軸で評価する。
グループ２
　大切なのは、信頼と手順
グループ３
　成績は、公平性のある試験と日常の勉学努力の評価である。
グループ４
　学生のモチベーションを喚起し、評価の透明性を高めて到達目標を達成しよう。
グループ５
　大学の社会的責任を含めた学習上の達成目標を明確に提示し、社会と学生に対して客観性のある評価方法を確立する。
グループ６
　評価しやすい側面と意欲・情熱など、しにくい側面をいかに総合的に判定するか。

この作業では、まず、最初に出されるカードが事実を反映したシンプルなものであること、そしてそのカードに表された表面的な言葉ではなく、それを書いた人が何を言おうとしているのかをグループで引き出すことが大切である。その引き出しあいの過程で追加されたカードを含めて、似た内容のカードを集めたり、関係性を考えたりしながら集類する。その際、カードに書かれた言葉の類似性で分類してしまわないことが重要である。ひとつひとつのカードを読み、それを書いた人にその真意を確かめ、グループ全員で「味わう」ことが、最後に導かれる主文の重みを深めていく。

この「味わう」という過程を理解し、実行するのは意外に困難である。「味わう」過程では、グループメンバーの粘り強さ（テーマに対する思い）、コミュニケーション力など、グループとしてのエネルギーや能力が問われる上に、味わいや推敲にかかるある程度の時間的な余裕も必要だからである。グループ内のコミュニケーションが十分でないと、だれかに引きずられたり、時間の制約を受けたりし、結果として、適当にまとめたものになってしまう恐れがある。十分に味わい練られた結果導かれる主文は、「本当に言いたいこと」を最も明快に表すものになる。

今回のワークショップの成果を、ワークショップ終了後、大教センターで再度味わってみた。その結果が図１であり、最終的に参加者がめざしている成績評価の目標の例を掲げた。それが、図中右中央に示した、「成績評価の目標は、①人材（学生、教員）を育てるものであること、②誰から見ても、大学の教育力に対する信用に値するものであること」である（これを読んでもし「当たり前だ」の声が聞こえたなら喜ばしい。このことについて、全学の協議にかけずともコンセンサスが得られたことになる。そもそも、過去を翻って、このような当たり前のことについて、果たして全学でコンセンサスを得たことがあっただろうか）。この図は、あくまで参考例にすぎないが、大切なのは、このようにして生じる目標は、どこからかの借り物ではなく、実際に、本学の教員自身が大切にしていることから生まれた目標だということである。この図は参考までにするとして、改めて成績評価の目標は何であるのか、味わってみていただきたい。そして、その明確な目標をかかげ、照らし合わせて、現状をもう一度振り返る。目標にそぐわないことは直す。このプロセスが次の課題となる。

(3)　１日を通しての振り返り―成績評価の今後の課題―

ワークショップの最後に、今日１日を通して「成績評価」について振り返り、今後の課題について参加者全員が発言した。これらの発言は、ファシリテーション・グラフィック（FG）によって記録された。

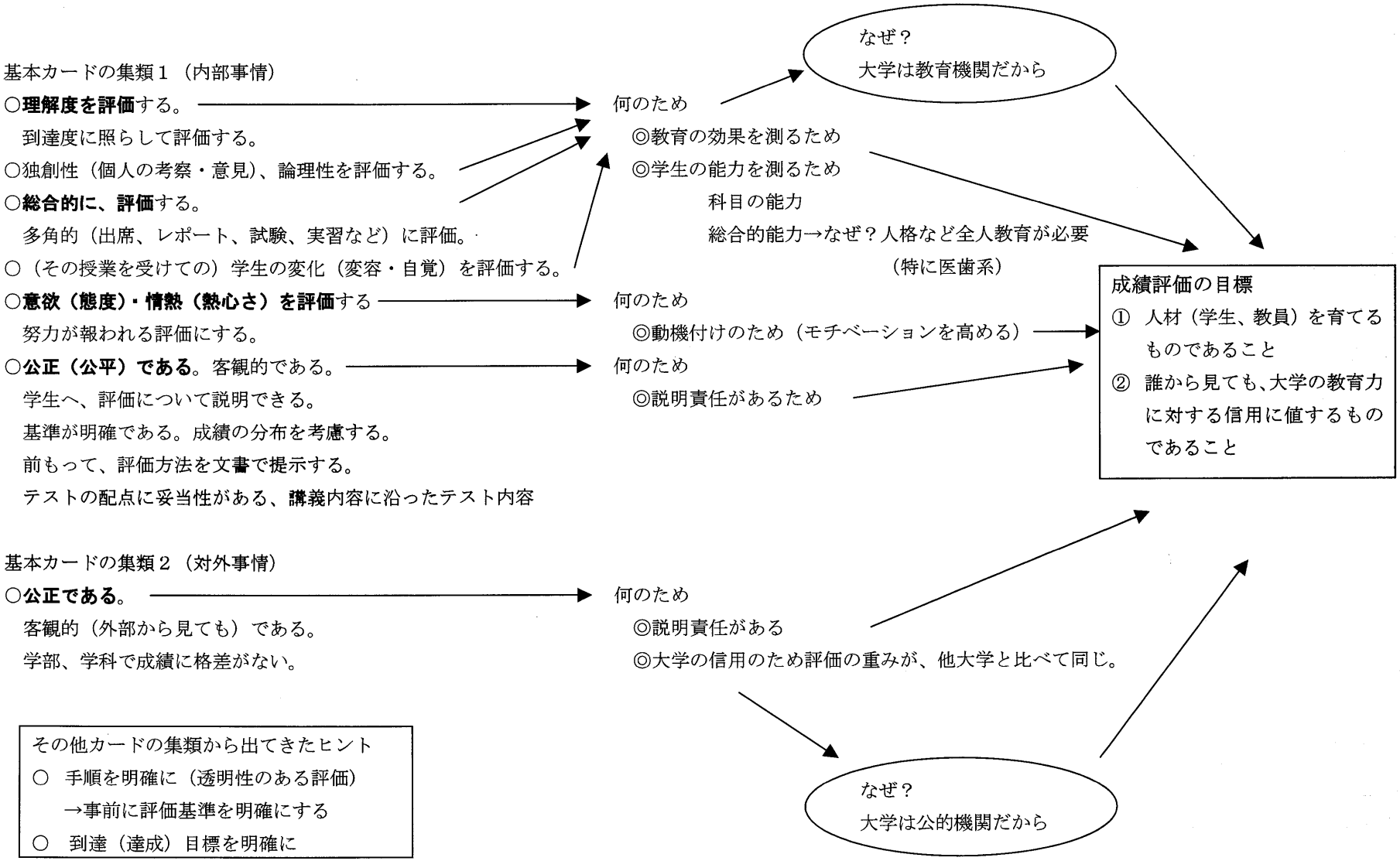

図１ 「成績評価をする際に大切にしていること」から成績評価の目標を引き出す

FGの記録を改めて見直しつつ、参加者の発言を振り返って最も印象的であったのが、多くの教員が知識量や理解度を測るような試験による数値的な評価と、その他学生の意欲（出席など）や人間性、多様性などの評価を、どのように位置づけたらよいのかについて迷っている、ということである。FGに記録された発言を借りると、「義理と人情の板ばさみ」になっているという。しかし、ひとつの授業の中で、知識の習得から人間教育まですべてを評価する必要があるのだろうか。総合性を考慮しないということでなく、たとえば、カリキュラム全体において、学生の全体像が評価されるという評価のあり方は考えられないだろうか。このような疑問に関連するように、「もはや授業は俗人のものではない」のであり、学部や学科のカリキュラム全体の１つとして各教員が捉えなおす必要があるとの発言もあった。

さらに、資格や免許、技術などにかかる授業内容である場合のように、主に試験の結果による評価が重視される場合もあるが、医学教育のように人間教育がより重要になりつつある状況などがあげられた。また、総合的な評価の場合、レポートを返却するなどの双方向性や、客観性を維持するために例えば複数の教員で評価をするなど、教員をサポートするシステム構築の必要もあげられた。

その他、どのような成績評価をどこまで行うのか、大学としてどのくらいまでできるのかを明確にすること、関連して授業やカリキュラムの目標を明確化することの重要性があがった。その際、大学だけでなく、「地域、初等・中等教育と一緒に考えていく」必要があるのではないか、という発言もあった。また、ある学部の３名の参加者のうち２名が、「うちの学部は、危機感が足りないと感じた」という振り返りをしていたことは、別な意味で今回のワークショップにおける成果と言える。

以上、全体での振り返りを、簡略的ではあるが総括した。厳格な成績評価を行うための明確な方策の提言には至らなかったものの、成績評価がカリキュラムのあり方や、さらには大学としての教育の目標などと切り離しては捉えられないことなど、本質的な問題点が散在しつつも浮き彫りにされたことは、興味深い。ここでの成果を次につなげていきたい。

なお、「一言ずつ」の予定であったが、その場の盛り上がりも手伝って、思いを熱く語られた人が多く、結果として予定時間よりも30分ほど延びてしまった。この場で生まれることを、このメンバーで分かち合える機会は二度ないというファシリテーターの判断で、一気に最後の一人まで続けてしまった。しかし、やはりそれは一方的というものである。ファシリテーターを含めて参加者全員の場としてのワークショップにおいては、終了予定時間がきた時点で、このまま続けてもよいかを参加者に確認し、合意をとってから継続すべきであったと反省した。

おわりに

ワークショップが何であるのかについて論じることは、本論の主旨に沿わないため、ここでは深くは触れないが、最低限の共通認識として、ワークショップとは、何かを教える場ではなく、その場に潜在する知識や知恵などを引き出し、新しい知識を創造する場であることを、示しておきたい。

プログラムの作成者であり進行役でもあるファシリテーターは、あくまで参加者が自分を出して参加しやすくなるように「お手伝い」するのが役割であり、何か答えを持っているわけではない。あくまで、答えや解決策を見つけるのは、参加者自身である。

ワークショップのもう一つの醍醐味は、よく言われることであるが、「オンリーワン」を創出することである。自分を振り返り、現状を振り返りながら、今ここにいる人、ここにあるものを生かすことによって、ここにいる人、ここにあるものだからできることが生まれる、という考え方である。このような考え方を参考に、自分自身の振り返りの中に、この大学だからこそできることの可能性を見つけ、それを実現させていく場（コミュニティ）づくりを考えていきたい。その意味では、今回のワークショップ形式FDの試みを通して、大学コミュニティの基盤をつくっていくためのFDの必要性および可能性を、実感できたことを嬉しく思っている。

参考文献

○ Mezirow. J. and Associates, *Fostering critical reflection in adulthood*, Jossey-Bass, 1990

○ Cranton. P, *Working with adult learners*, Wall & Emerson, INC., 1992

○ エリヤフ・ゴールドラット『ザ・ゴール2』三本木亮訳、ダイヤモンド社、2002

○ 中野民夫『ファシリテーション革命－参加の場づくりの技法』岩波アクティブ新書、2003

○ 世田谷まちづくりセンター『参加のデザイン道具箱』1993

○ 清水義晴監修『集団創造化プログラム・ワークショップの可能性を探る』博進堂・えにし屋、2002

資料１

平成15年第１回全学FDプログラム
「成績評価の現状を把握し、今後の課題を考える」

プログラムの目標

学生や大学の教育について、教員が思っていること、感じていることを共有し、コミュニケーションの場をもつ。その上で、参加者全員で成績評価の現状を見直し、今後の課題について考える。

プログラム日程

日時：平成15年９月30日㈫９：30（20分受付開始）～16:30

場所：留学生センター国際交流室（総合教育研究棟Ｄ棟３階）

９:20　**受付**（名札の記入、資料の確認）

９:30　**開会あいさつ**（本日の目標の確認、本学における成績評価の現状について）

９：45　**オリエンテーション**：プログラムの説明、スタッフの紹介

ファシリテーター：濱口（テーブルファシリテーター、以下TF)、津田（TF)、吉永（TF)、加藤（総合､TF)

ファシリテーション・グラフィック：阿宮由子氏（NPO法人まちづくり学校）

会場スタッフ：教養教育第１係、安尻薫

会場スタッフ兼TF：佐野智香、布施健太郎（教育人間科学部４年）

10:00　**ワークショップ１**「最近の学生（の学習状況）について」

インタビューゲーム

「最近、授業等で感じる学生の状況」をインタビューして、まとめる。

インタビュー（30分）ワークシートの記入（個人で編集作業）(50分)

(11:20まで、各自でトイレ休憩)

11:20　**個人発表**　各１～２分×30人（40分）

12:00　**お昼休み**

13:00　**チーム分け**（５人×６チーム）

13:15　**ワークショップ２**「成績評価の現状と今後の課題」

現状把握その１「成績をつけるとき、大切にしていること、大事なこと」をグループでまとめる。

(グループで90分)

14:45　**休憩**

15:00　**グループ発表**　５分×６チーム（30分）

15:30　**全体会**「成績評価の今後の課題」

全体で、ファシリテーション・グラフィックを使ってまとめる。

16:30　**閉会**

ふりかえりシートの記入

資料2

ふりかえりシートのまとめ

「ふりかえりシート」は、A41枚に「1. 今日気づいたこと、2. 今日嬉しかったこと、3. 今日不満に思ったこと、悲しかったこと、4. 今日言い残したこと、5. 最後に一言」の5項目について、FD終了後に各参加者に記入してもらった。ここでは、当日提出されたもの、後日提出されたものを、提出された順に、項目別に並べた。なお、提出は義務ではなく、提出者は19名であった。

1．今日気づいたこと

○　学部間で教育に対する認識が違うこと。（歯）

○　参加者の方々がみんな熱心に授業のことや評価について、関心をもっていらっしゃること。(留)

○　全学部の先生が一同に揃うのを見るのははじめてだが、やはり学部ごとになんとなくキャラクターがあるなと思った。（工）

○　多様におのおのが工夫をされているということ（うれしいことでもあります）がわかったこと。人間性まで含めた評価をすることはエネルギーがいることですが、新たなエネルギーになりそうです。（保）

○　成績評価の厳格化が求められている中で、学生の意欲や情熱をいかに評価の中に反映させていくべきかという課題が、ますます重要になっていくだろうと感じました。（経）

○　思ったより、教育に対して真面目な教員が多い!!（理）

○　分野によっても、それほど考えていることは違っていなかった。（理）

○　午前のテーマはまとまりが悪かった。午後のテーマは盛り上がった。（工）

○　全学レベルのFDが十分でないこと。（歯）

○　学生の評価について、どの学部の先生方もいろいろと苦労されていること。（教）

○　全学部の先生が、研究にも教育にも熱心であること。（人）

○　学部により、学生にも授業にも評価にも差がある。（医）

○　講義や授業で悩んでいる先生が非常に多い。学部や担当の違いにより、かなり事情が異なっている。本当の教育法は、いまだ未熟な気がした。（医）

○　問題点がかなり共通すること。（経）

○　成績評価、評定については、皆同じような悩みをもっていることに気づいた。そしてその悩みから解決の方策を練る手順、内容は教育評価の歴史、系統発生を踏襲しているように感じた。（教）

○　総論的に、「学生評価をどうすべきか」教員共通の認識がある。しかし、各論になると実践できていないケースが多い。（保）

○　ワークショップという形式は、「なんとなく」「大枠」での一致点を探るためには行こうだが、つきつめてひとつのことの本質を議論するには向かない仕組みだと感じた。フリーに流れるようでいて、課題の立て方、初期説明のしかたにより、出てくる結論は一定の方向に収斂するものだと感じた。（農）

○　成績評価についての問題意識は共通だということ。（法）

2．今日うれしかったこと

○　異なる学部間で、共通の問題を討議できたこと。（歯）

○　午後のグループ活動でいろいろ深く話し合えたこと。（留）

○　色々と視点があり、議論が拡散してしまったところもあったが、皆様が一様に熱意あることが大変感銘を受けました。（工）

○　他の部局の先生方と色々とお話できたこと。（工）

○　各先生方が、それぞれの授業科目の中で、学生の意欲を高めようと悩み、工夫していることが確認できたこと。（経）

○　他分野の人の成績評価の考え方が、多様だとわかった。（理）

○　いろいろな分野の方と話ができたこと。（理）

○　教育の本質を理解している人が集まっての話ができたこと。（工）

○　普段のお会いすることのない他学部の先生方と討論できたこと。（歯）

○　普段お会いする機会のない他学部の先生と情報交換ができたこと。（教）

○　教育に力を入れることで、次の世代が育つことが、研究の発展につながるという確信を得られたこと。（人）

○　多くの教官が、同じような悩みを持っていること。（医）

○　本学の教官は、教育について一生懸命考えている。いろいろな先生と話すことができた。（医）

○　新潟大学のいろいろな事情を知ることができたこと。（法）

○　他学部の教官と話し合いができたこと。その話し合いから、共通項や示唆を得たこと。これまで交流のなかった方々と知り合えたこと。（教）

○　それぞれの教員が日々、自分の講義を改善し、少しでも学生に伝わることを充実させようと取り組んでいることがわかり、力強く感じた。（農）

3．不満に思ったこと

○　自由討論の時間がなかったこと。（歯）

○　時間が少し延長したこと。（留）

○　少し議論の時間が短い。もう少し深く掘り下げたかった。（工）

○　質的に深めるために、もうあと半日あれば良かったかなと思います。けれども、後は自分がどうするのかの問題なのかもしれません。腹八分目がいいのかもしれません。（保）

○　時間管理については、前もってタイトに進めるように宣言しておくほうが良いかも。（工）

○　テーマが大きく、様々な意見が飛び交い、全体として散漫になってしまったきらいがあるように思います。（経）

○　論点を掘り下げる時間がない。論点を平均化するよりも、特徴のある成績評価の論点をとりあげ、討論を深めるのが良い。（理）

○　時間的に十分な議論ができなかった。（理）

○　この時間では無理だが、掘り下げが不足と感じた。しかし、このように教員をフラストレートさせて、欲求不満にさせることは有効であり、深い作戦かとも思う。（工）

○　時間管理

○　KJ法を使ったブレインストーミングであることを、前もって知らせておいていただくと、最初のインタビューが違っていたはず。（人）

○　本ワークショップの一般目標、行動目標が示されていなかった。大学教育を考える機会になったと思うが、成果としては具体的なものにはならなかった。（医）

○　具体的な解決策が見出せなかった。（法）

○　それぞれの先生方のポリシー、教育方法について、もう少し詳しくうかがうことができたらよかった。しかし、時間に限りがある中で、テーマを絞る必要があるので難しい注文だとも思います。（教）

○　今日のワークショップへの動機付けが稀薄だったため、GPAが何だったのか不明。（保）

○　一つ一つについて更に踏み込んだ議論があればいい。ただし、一定の時間で、あれもこれもとはならないことも分かる。（農）

○　これは、各教員が研究時間を犠牲にしてまで参加するほどの内容ではないと思います。１日が無駄でした。問題が理解できた or 解決したと言われた先生がいたでしょうか。（法）

4．今日言い残したこと

○　学生の評価の前に、教員を評価、教育しないといけないと思う。（歯）

○　シラバスで明確に授業内容を宣言してしまうと、その後の授業の柔軟性に欠けるのではという問いかけをなさった先生がいらっしゃいましたが、変更したい場合は、その都度学生の同意のもとに（一方的ではなく）、シラバスの改訂版を出せばいいと思ったことです。（実際に私はこのようにしています。）（留）

○　考えまとめるような授業に活用できそうな手法でした。（保）

○　大学として、学部として、教育にどう取り組むのか特色をはっきりさせることが必要です。（工）

○　不可をつけても、それがその学生にとって教育になるような評価ができることが成績評価の理想だと思います。（経）

○　すべて言いました。センターのスタッフが出すぎず、うまく運営されていました。（理）

○　いくらでもあって、ここには書けない。（工）

○　今日の会合にはあまり関係ないが、新潟大学における英語教員一人に対する学生数は453人で全国最低レベルである。マンパワーの減少がさけられない中で、どのようにして教育の質を確保するかは、きわめて深刻な問題であると感じた。（人）

○　今後、教員の評価、授業の評価も必要になると思われる。（医）

○　FDを活用して、問題を解決していってほしい。（法）

○　知と知の間をつなぐミッシングリングはどのようにして育むことができるか、についても教育上必要であろうし、そこをどのように評価、評定につなげるかが大学としては重要だと思われます。（教）

○　今日の結果をどのように学部にもちかえるか？（農）

○　時間通りに終わってください。結局、FDの目的がよく判りませんでした。「成績評価の現状」＝データがないのだから、個人の感想のよせあつめにしかならない＝準備不足。（法）

5．最後に一言

○　FDは、ワークショップ形式でやらないと効果が上がらないので、今後の企画を期待しています。（歯）

○　充実した一日でした。参加者を「さん」づけで呼びあえたら、もっと深く話し合えたかもしれません。（「先生」と呼びあうことで、なんとなく遠慮を感じてしまいました。）（留）

○　大変、有意義でした。ワークショップ、授業の参考にします。（工）

○　ありがとうございました。（保）

○　多数の意見が正しい方向を導くとは限りません。少数意見にも光るものがあります。（工）

○　心地よい疲労感が残るワークショップでした。加藤さんはじめ、スタッフの方々、ありがとうございました。（経）

○　十分楽しめました。（理）

○　またFDをやってください。（理）

○　今迄の講演型FDと比べて、大いに良い。ご苦労様ですが、今後も続けてください。お世話ありがとうございました。（工）

○　ファシリテーターの皆様、お疲れ様でした。準備大変だったと思いますが、今後もワークショップ形式のFDをいろいろなテーマで続けていただきたいと思います。（歯）

○　ワークショップの企画、運営、ご苦労様でした。（教）

○　コーディネーター、ファシリテーターの方、本当にお疲れ様でした。（人）

○　ありがとうございました。（医）

○　ワークショップでの成果が、学内全体の教官にも伝えられるべきだが、誤字などは十分チェック訂正の上、修正して公表してください。（医）

○　各学部からご参加の優秀な知を、今日のようなワークショップで導き出す試みは、とてもよい検討方法だと思います。これからもこのような新たな試みを期待しています。これらの結果をどのようにして生かしてゆくかも検討していただきたいと思います。（教）

○　企画、実行、お手間をかけました。感謝と敬意を表します。（農）

○　大学の教官は、教育技術、評価技術、etc. を一度も学んだことのない人々が行っているケースが多い。このようなFDワークショップ参加のみが、その機会であろう。一個人の成績評価が、新大の評価となるよう、早期に一度は全員参加経験を持つように運営すべきだろう。（保）

○　「分析」＝正確な現状認識に基づかない分析は不可能。結局、マーケティング・ゲームの手法を各参加者に知らせたにすぎません。これが目的だとすると、各専門分野で研究者として、あるいは教育者として働いている教員に、研究・教育の方法論を「学ばせる」というのは失礼ではありませんか？　各人が留意している成績評価の方法（＝これが正当かどうかも不明）から、主文（前提の正当性が不明なのだから、こちらの正当性も当然に不明）を導き出すことに、どういう意味があるのでしょう?結局何がしたかったのですか?真意に本当に耳を傾けたかったら、記名式アンケートは非効果的です。（法）

→正直なご感想をありがとうございました。少し気になることがありましたので、コメントします。

「各人が留意している成績評価の方法（＝これが正当かどうかも不明）から、主文（前提の正当性が不明なのだから、こちらの正当性も当然に不明）を導き出すことに、どういう意味があるのでしょう」というご意見ですが、この「正当性が不明」といわれる各教員の判断によって、厳格であるべき、そして公的な説明責任のある成績評価が、行われています。そして、そのような成績評価を行うことを、自分の権限であると考えている教員がいます。そうした現状を踏まえて、このワークショップの企画では、現在の成績評価が「正当」であると確信を持って（若しくは確信を持てないまま）評価を行っている自分たちの現状を振り返り、その延長線上に、「果たしてこのままで良いのか」という疑問、危機感が生まれてはじめて、改善が進んでいくのだと考えました。

今回のワークショップは、前述のワークショップ計画の背景において触れたように、「振り返ることによって学ぶ」ことを高次の成人学習として位置づけている成人学習理論などを参考に、プログラムを組みました。しかしながら、「結局何がしたかったのか、わからなかった」というような内なる声に、ワークショップの中で気がつくことができなかったこと、そのような疑問を参加者がその場で出せる場にならなかったことは、ファシリテーターの至らなさによるものであり、余裕のないプログラムであったことを反省したいと思います。

それから、振り返りシートに記名していただくのは、参加者一人一人の声を振り返り、次へつなげていくためのものです。もしも、記名式では言えないことがあるとおっしゃるのでしたら、そのように言っていただければ、無記名でも一向に構いません。こちらの説明不足でしたが、ワークショップとは参加者全員がつくる場であるということをご理解ください。（加藤）